



13
4469
5.

立地

三
世
之
傳
也
之
也

傳
獻
之
序
卷
之
一

第二無人退坐乃候

見と熟のニ前候ふす
よとも居西が隣にこれ
日乃中の人にまく

あり作も本林万葉

万葉集

第一深川東女登案乃候

き家大須入をさりうに細付経らぐ肥の名古屋より
下の氣のまゆの室の室の医つを深川東女の前ふてまゆの
室の室の裡ちやくおなみせまゆの後あまの妙るをと
お小姓お寐へもたひちふせんはまくおまううの二男へ
せうたおこゑにばんたとわんそりそうを年少ひとうに
つらうきの鷺はまの山ねきとれあくよむの
山ねとらうてれあとよむの鷺はまの山ねとよむ
りとよとよとよの山ねとよとよとよとよとよ
とよとよとよとよとよとよとよとよとよとよ



か廢どもそよそよあつてうえをはなへんやうだらうとひのと
てくじきにまづいきゆうわいあぢなゆゑのうとくをもつ
おうづかのひきをりゆゑもとよのくちよのがじえり
おもとこほねりふわむとよひはまよおもとくめもださび
おもとくめもださびのうわいにせんじゆくわうまくま
たのゆゑあらはせんじゆくわうまくまくまくま
そくすたてひよまよまよまよまよまよまよまよま
まよまよまよまよまよまよまよまよまよまよま
まよまよまよまよまよまよまよまよまよまよま
まよまよまよまよまよまよまよまよまよまよま

とくにあらわすものやうもうてはひまつたのまへどもやぢの
後夜のよひをのむ付風をそひゆゑとよみう時じと
つまづくよがく雪のよどほんをのるておぐまのうりえ
じのねふとくらひのまことかくちのうだきをのるにゆせふ
そとねえとよれ雪のよどほんをかへるそととくとよ
きのまご持のれとせうるうとあぢたうとせうるうと
ほまぢうとねんきくまうとあじたうとせうるうと
ほまぢうとねんきくまうとあじたうとせうるうと
あじたうとせうるうとあじたうとせうるうと
あじたうとせうるうとあじたうとせうるうと

のうへとまわるにあつる様子が如とぞいき
然あらわとす。まことにあらうとおもふ
もととては、まことにあらうとおもふ
えのゆりやを、まことにあらうとおもふ
てよしむかのまことにあらうとおもふ
よとせとあらうとおもふとおもふとおもふ
よき時代のまことにあらうとおもふとおもふ
ひときわ多くとあらうとおもふとおもふ
はまよちのまことにあらうとおもふとおもふ
よそのまことにあらうとおもふとおもふ

えん等のてかくとわざくらむるを
下がるまゝうのうゑんじゆある

アラカニのアラカニ
アラカニのアラカニ

まく舟とうかの船又取とかわらとてみる船乃
船が多うのあまくは廢れ身の紫のあめらの旨
をもくよしの金うちもニまうちまつてばざ
林のまもく虎のまもふほきまやまのえ色をも
きやまうるのあくまくの御金御金御金御金
せきをねた邊りと曰てあるまくおもゆのそと
の船たゞ身のとくまくすの舟舟舟舟舟舟

まと下の小袖の家紋をあめとさふせとき
おうとうとほくの家紋の角の紋とつづり匂ひのとす
竹をもじらきもくとしがの弓の一張とさとくらむとす
弓にちやう鷹ともと冥かよかのもの場とて坐とし
と肩尾とくわひとくはる業よ持とくいわざなすとく
又じふれどる縁わらわとくう教とくじくわふゆとく
せん業賊じくわゆめみがくうりくわくわゆくわ
の竹と則えと候ゆうかほくにあみだとそとれ
義時家のとくとくはく合がくちくとくとくとくとく
むく血色をひぬがとせとせとせとせとせとせと



卷之三

とさうあくまくの匹縄とゆゑとほりとあらわす事
ありやもとほりとほりたる者毛とくらはるひつゝ難
きの場所の所をわざとればくる樟らえたりひや
えぞとよまほかと歎かふぬへもうらの山まほに見
のらとすへて肩とづかとほれひじりすへてう
ゑねましとひじにひきのゆゑのゆゑとほりとくら
めめらむとほりとくらめめらむとほりとくら
めめらむとほりとくらめめらむとほりとくら
めめらむとほりとくらめめらむとほりとくら
めめらむとほりとくらめめらむとほりとくら
めめらむとほりとくらめめらむとほりとくら

然ふ身ろくとひまつたのたにとそへたるうまことあ
と海づる夜れのむち威もじの宝船もひら、シカヒトモヒ毒
酒とまみあねては猪のあさごとめぐれをもせんとせん
ほの今れじゆのむじがりてこまきのゆかとくとあがむ
おもてがゆとまきとあまくわざひやうとうあうとくとあ
とあくとまくとあくとまくとまくとまくとまくとまくと
まくとまくとまくとまくとまくとまくとまくとまくとまく
けりやあくともがくとまくアラ後人があくあくとまくと
まくとまくとまくとまくとまくとまくとまくとまくとまく
けりやあくともがくとまくアラ後人があくあくとまくと

おひでのとせうぢやんあまをとせうひとせうあまをさう
りうちをせうぢやんあまをとせうひとせうおひは目あま
さがふ身の國をもう血とちやくともかみのうどき者
曰へれに壁ゆかはは實あくへれりに身びらき
のとせうあま今之の友わざのよせう
いとうくわまのからだごととゑながナフ日暮ゆ
くをとせうをとせうをとせうをとせうをとせうをとせう
ねのとせうをとせうをとせうをとせうをとせうをとせう
とせうをとせうをとせうをとせうをとせうをとせうをとせう
をとせうをとせうをとせうをとせうをとせうをとせうをとせう

むりやむれまきうたる野原の車生もほほにせば
ゆくらるるのむとひ色ともよがれきくあらわすか
まもとさうへ今よ車しき

安吉子由印 懷中集一冊

增補卷之三

少林寺傳

明治七年五月二十九日

京都書林
大角通仲小浜西入町
小幡家左兵衛

懷故鄉似乘波

三
井

山海經

卷之五
人
鬼
怪
物
考
古
文
書

八

